



6年生ディベート ～ 論理的思考とその表現 ～



7月17日（金）、6年生の総合的な探究の時間でディベートを行いました。6月末から班ごとに分かれ、テーマの選定、肯定・否定それぞれの立論の準備に取り組んできた、その成果発表です。各班とも、インターネット、書籍等から論拠となる各種統計資料や専門家の知見を収集し、自分たちの主張を組み立てます。この日テーマとなったのは、「人工妊娠中絶の是非」、「安楽死の是非」、「教員のAI化に賛成か、反対か」、「世界での武器開発の是非」、「代理出産の是非」、「美術館における展示作品撮影禁止の是非」、「水上都市建設に賛成か反対か」、「農業の全面機械化の是非」等でした。

「人工妊娠中絶の是非」（ディベート後に提出されたレポートから）

今年の6月29日に、米連邦最高裁判所が南部ルイジアナ州で制定された人工妊娠中絶を制限する法に違憲判決を下した。人工妊娠中絶の是非に関しては、宗教的、倫理的な観点から意見が割れていて、今回の米国の判決でも、僅差でルイジアナ州法が違憲とされている。私の立場は、人工妊娠中絶（以下「中絶」とする）を行うことに賛成である。

まず、この議論の中での中絶とは、望まない出産において胎児を合法的に体外に取り出す行為とする。中絶によって、望まない子どもの出生を防ぐことは、親による子どもへの虐待を防ぐことにつながる。厚労省によると、虐待死した子どもの約20%が0歳0日児であり、虐待の理由として「望まない妊娠・出産」が挙げられている。また、子どもの貧困を防ぐために中絶が行われている側面もある。日本産婦人科医会によると、経済的問題が中絶を行う理由の約70%を占めている。東京都の調査で、貧困世帯の子どもは一般家庭の子どもより抑うつ傾向を示しやすいとされるように、貧困は子どもの幸せに大きく関わる。このように、子どもの生後のことを考えると、中絶にはメリットがあると言えるだろう。

しかし一方で、中絶は母体に精神的・肉体的ダメージを与え、時には不妊の原因となることもある。「第5回男女の生活と意識に関する調査」で、中絶した人の約半数が「胎児へ申し訳ないと感じている」と示されているように、中絶は親に罪悪感を抱かせ、場合によっては親の精神状態を不安定にさせることがある。また、中絶手術で子宮穿孔感染症などが起こることがあり、それが原因で妊娠ができなくなることもある。加えて、中絶が再度の安易な妊娠、中絶につながるという意見もある。「第5回男女の生活と意識に関する調査」によれば、中絶を繰り返す割合は約30%であり、2018年の中絶件数161,741件と併せてみると、相当数が中絶を繰り返していると言える。これらより、先を見た時に、中絶にはデメリットが大きいとする意見もある。

ここで、そもそもなぜ中絶が行われるかを考えると、望まない妊娠をしたことが挙げられる。ここまでふれてきた中絶をした、あるいはしなかったことによる問題は、男性より女性に多くの影響を与えるにも拘わらず、妊娠するかどうかを大きく左右する「避妊」の多くは男性主体である。女性が自分の意思で避妊できる方法をとっているカップルはわずか10%ほどとする調査があるように、妊娠する時に女性の方の決定権が弱いことが多い。そこで、望まない出産を女性の意思で防ぐのが中絶だ。1994年の国際人口会議で示されたリプロダクティブライツ（生殖に関する権利）の中に中絶の権利が含まれるように、中絶は避妊では弱い立場に立つことの多い女性の人生決定の手段だと言える。

よって、私は中絶を行うことに賛成する。このような生殖に関する諸問題は、倫理や技術、社会通念など、多くの要素が複雑に絡んでできている。このような問題が報道で取り上げられることも多くはない。しかし、だからこそ人々が積極的に考えて、自分なりの意見を持つことが大切なのだと思います。

コンピュータ室や図書館で資料を集め、班のメンバーと立論の準備を進めました。



新潟県立村上中等教育学校

〒958-0031 村上市学校町6番8号 TEL.0254-52-5101 FAX.0254-53-6773

HPアドレス <http://www.murakami-ss.nein.ed.jp>